

代の溝跡、平安鎌倉時代の溝跡・水田跡などの遺構を検出した。主な出土遺物には弥生時代の丹塗土器を含む多量の土器、石器、鉄器、ガラス小玉、青磁などがある。

木簡が出土した遺構は北西―南東方向に走る幅2m前後の溝で、国鉄鹿児島本線白木原駅の西約100mの地点に位置する。発掘区が限られていたため溝は約20cm分を検出したにとどまったが、溝内からは八世紀前々中期ごろに比定できる須恵器や土師器とともに木製大型盤が二個、木簡が二点出土したが、前述のような理由からこれらの遺物が本来的に属していた遺構は確認できなかった。またこの溝の南方約300mの地点で奈良時代の版築状遺構が検出されたが、これは大宰府と鴻臚館（筑紫館）とを結ぶ官道の可能性もある。木簡などと直接には関連しないが、注目される遺構である。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 卅五歩 一院収 田カ 一段百七十歩 (175)×(33)×5 081
一院 田カ 一段百七十歩 (175)×(33)×5 081
- (2) 一 田カ 一段百七十歩 (175)×(33)×5 081

二点とも上端は二次的に切断されている。(1)の左端は文字の間近で切断され、断面も不整であり、二次的切断と考えられる。田積を記しているが、上部を欠損しているの、内容は明らかでない。

9 関係文献

当面は未定であるが、将来報告の予定。

(倉住靖彦)

福岡・長野遺跡

- 1 所在地 福岡県北九州市小倉南区長野
- 2 調査期間 一九七九年(昭54)五月
- 3 発掘機関 北九州市教育文化事業団
- 4 調査担当者 小方泰宏・木太久守・佐藤浩司・柴尾俊介・山口信義
- 5 遺跡の種類 集落跡・古代官衙跡?・中世豪族居館跡?
- 6 遺跡の年代 古墳時代後鎌倉・室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(小倉・行橋)

長野遺跡は、周防灘に面した曾根平野のやや奥まった低丘陵上一帯に展開している。九州縦貫道小倉東インター工事に伴って調査が今も実施されている。

調査は、標高一〇m、二〇mの低丘陵から竹馬川に向って枝状に張り出した支丘陵部を中心に実施している。それぞれの

支丘陵上から、古墳時代の堅穴住居跡が検出され、これまでに総数七〇棟以上が確認されている。須恵器・土師器の他、鉄製農工具の出土も多い。なお谷間からは水田跡も検出されている。奈良時代の遺構は少なく、数基の土壇と柱穴が検出されるにすぎないが、包含層から出土した須恵器碗の底部に「企救一」「大」等を墨書したものである。平安時代には、堅穴住居跡、掘立柱建物跡の他、支丘陵を断ち切る様な巾一〇m、深さ二mの大溝（空堀）があり、これに連続する支丘陵間の谷間を埋めて土塁を作る。大溝と土塁を合せて全長一二〇m＋αに達している。この時代の瓦数点、緑釉、すずり、銅製の帯金具等が出土している。以上の点から、普通の集落とは異なり、特殊な性格をもった遺跡ではないかと考えられている。

木簡は、丘陵西側の試掘調査トレンチの上げ土の内から採集したものである。出土地点は支丘陵先端部の低湿地にあたる。この地点は長野E遺跡Ⅱ区として調査を実施した。その結果では、青灰色粘土が厚く堆積した低湿地で、かつては芦原であったと思われる。上層から木杭、溝？等が検出された他、土師器、磁器の細片が出土したが時代の詳細は不明である。木簡は、この上層からの出土であると考えられるが、正確な出土層位は確認できなかった。下層からは、古墳時代の木製鋤・完形に近い土器等が出土している。

8 木簡の积文・内容

× やかし米」

(98)×23×3 059

上部は欠損。材質未確認。ひらがなと漢字とでは、運筆、筆圧等が異なる様に思える。

9 関係文献

北九州市教育文化事業
団埋蔵文化財調査室

『発掘ニュース十五号』

一九八一年

同 右

『発掘ニュース二十号』

一九八二年

(小方泰宏)

